

■背景と目的

ヤマザクラは広葉樹の中でも最も県民に親しまれ、よく植栽される樹種のひとつである。当センターでは、斜面下部域における不採算人工林の針広混交林化に向けた植栽樹種としてムクロジを選定したが、斜面上部域での植栽にはヤマザクラが適していると考えている。一方、よそから持ち込まれたヤマザクラとの種内交雑により、県内のヤマザクラ自生個体群の保有する地域的特徴や環境への適応力などが失われることが危惧される場合は、自生個体群由来の地域性苗木による植栽を検討する必要がある。

そこで、県本土の南部と中央部、北部の3地域に自生するヤマザクラ個体群の形質的特徴の相違を調べることで、地域性苗木の必要性を検討するとともに、スギコンテナ苗木の育苗技術を用いたヤマザクラの実生育苗に取り組んでいるので、その内容について報告する。

■調査地と方法

○ヤマザクラ個体群の形質調査

個体群調査地：南さつま市笠沙（20個体），南九州市知覧（13個体），伊佐市大口（17個体）
調査項目：花（花序の花数，若葉の色，苞葉の形状，花床筒の長さ，萼片の形状）
葉（葉身の形状，鋸歯の形状，芒の長さ，葉裏の色，基部の角度）

○ヤマザクラの実生育苗試験

種子の保存方法：低温保存（5℃）と保湿低温保存（湿ったココヤシ殻と混ぜて5℃で保存）
播種日：2021年9月21日
育苗方法：本葉が出てからMスターに移植。培地はココヤシ殻とバーミキュライトで体積比1:1。
培地には緩効性肥料を3.5～7.0g/ℓ配合。

■結果

○オオシマザクラとその雑種の出現状況

・知覧ではオオシマザクラとその雑種は77%，笠沙では10%の割合で出現したが，大口では出現しなかった。

○ヤマザクラ個体群の地域的特徴

・知覧ではオオシマザクラとその雑種が約8割を占めたので，笠沙と大口でヤマザクラ個体群の形質的特徴を比較した。
・笠沙の個体群には若葉が黄緑色の個体が混じり，大口よりも花付きがよく（図1），花床筒が長く，苞葉が幅広く，萼片が大きく，葉が丸みを帯びる傾向があった。一方，大口の個体群には若葉が黄緑色の個体は出現しなかった。

○ヤマザクラの実生育苗

・保湿低温保存した種子は10月に発芽したが，低温保存した種子は4月に発芽した。
・10月にMスターに移植した苗に比べ，4月にMスターに移植した苗は5月の段階で20cm程苗高が低かったが，7月になると両者の苗高さはほぼ等しくなった（図2）。



図1 笠沙個体群の花つきの良い花序

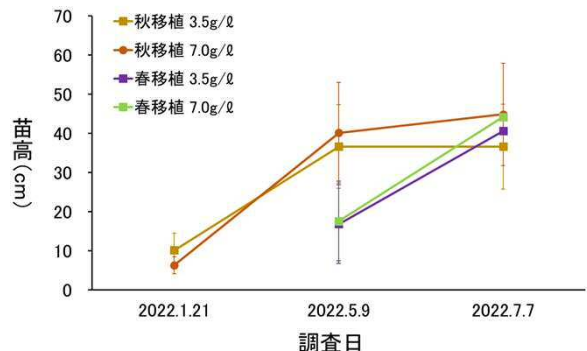


図2 Mスター移植1年目の生育状況

■考察

- ・国内外来種であるオオシマザクラの野生化によるヤマザクラ個体群の遺伝子攪乱が懸念されたことから，オオシマザクラの植栽はできるだけ控えるべきであると考えられた
- ・県本土には変種であるツクシヤマザクラの特徴を保有したツクシヤマザクラ型の個体群と，一般的なヤマザクラの形質を保有したヤマザクラ型の個体群が存在しており，各個体群はその地域の環境に適応した形質のおよび遺伝的な特徴を有している可能性があるため，県内におけるヤマザクラ植栽には地域性苗木を用いるべきであると考えられた。
- ・10月に移植した苗は春先に病害虫が寄生しやすいため，農薬散布によって未然に病害虫の発生を防ぐ必要がある。

■お世話になった方々

特定非営利活動法人森と木の研究所の皆様，森林総合研究所九州支所 勝木俊雄氏，北薩森林管理署，肝付町林務水産課